

911.3
八
1

非諧古今抄

再撰貞享式
日之一

排
寫
之
包
鈔



卷之六
 書物後
 十註
 十註

此從德意志國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之

德意志國之僧人

物序

蓮



圖類攷



卷之六

下

公家殿上の酒宴と云ふは士農工商の品を以て
いふことなれども此艶詞と云ふは侍者^{シフキキ}の
とあるはむしる今此能楽の只用と云ふは
のきと云ふらんやまうら連式といふは
はて詠抄と云ふは今これ能楽の能楽
と云ふは貞享此元年正月にけけけと
きりし子しと云ふは其式の大本あるは
評し論と云ふは中の能楽と云ふは連式
とのり信談手話と云ふはむしる能楽
評し論と云ふはむしる能楽

古今抄

三

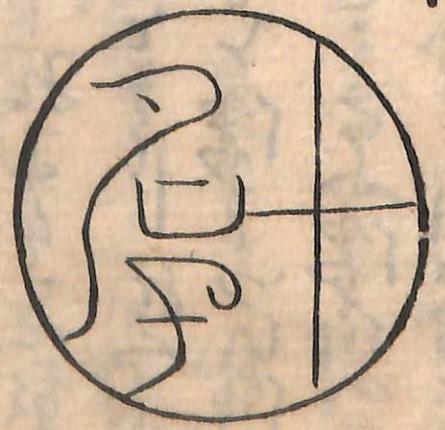
改綴下
思ふ事ヲ
タシテ

このうち左の所録と二冊しこのうち左の所録と一部
又母なるものばしと題する此建るふとむ言連歌と
しとていふは中右此詠歌と連言にゆりて
遠く古代の習俗とたうし近く今言の俳諧と
ひらちるべし俳諧古今おこると各所くむらりし
たしく一部のまじりしは初なる俳諧と古く
とて千系一斬の和訓あれは先師の古とて
ふとていふまじりしは二口西斬の和訓ありしきと
連歌の両式より法余とていふ言おこるといふ
和言此式とすねありし詠言連言のまじりしあれ

公家殿上の酒宴とていふと農工商の言をいふ
いふとていふまじりしは艶詞とていふし将也塔也事話
とていふまじりしは今此詠の和言とていふまじりしを規
のまじりしはやまうし連言といふまじりしはあま
はし詠歌といふまじりしはあま今こゝに詠之の詠
とていふし自ら言此は年日月にけはけはすといふ
まじりしはしとていふまじりし其式の本まじりしは
詠論とていふ中右の詠歌とていふし連言の式月
とていふし俳諧事話とていふまじりしはあまの
詠とていふまじりしはあまの詠とていふまじりしは

一 臣の私とりれさるるあはるる世國のいふ
たひて石さの鏡たるる井と談笑のた
たひあふるの林たじまるといひたれ
りて併諧のこふたふくたきん

享保己酉之月去祥日



享保十年
辰マテ二十
二年也

古今抄凡例

- 一 此抄ニ〇今按ト祖翁ノ用捨ナリ且下ニ新古ノ
遠目ヲ考ヘシ△再撰ト先師ノ監察トシテ△校
ト△蓮ニカ拾遺ナリ△以△今ノ相致ニ知ヘシ
- 一 此抄ニ愛評ト愛議ト明監ト△段ノ差別アル法ニ
支配ノ輕重アル座ト云ク一廿ト云ク百廿ト云ク
總テ△新古ノ決論ニ百慮一失ノ辞宜ト知ヘシ
- 一 此抄ノ省法ノ下ニ△家語ノ詞ヲ假テ實猛ノ三字ヲ
云△△制度ニ時代ノ變々ヲ云ク或ハ用ル其ノ自在

監察下ハ
目録ノ下

如是我聞トハ
法華經ハシメ
出テ結述ナリ
新向カ洞也

ニテ用オハ其人ノ不自在トハ今式ニ人ヲ^カ明セス^カハ
古凡ノ偏屈ヲ山明ニ下ナリ或ハ先師ノ再撰ノ下ニ^カ是
如^カ是トハ^カ經ノ知是我聞ニ^カ減後ニ再撰ノ折言語ナリ
一 此抄ニ證句ヲ^カ奉ルニ^カ系ヲ定テ各乘ナキハ總テ祖翁
ノ證句ナリ系ヲ定メス^カハ^カ印ヲ書テ直ニ送書ナリ
多ク先師ノ證句ナリ但シ別人ハ句下ニ其名アリ
一 此抄ニ^カ里園ノ印ハ總テ^カ文法ト句格ナリ然レテ文字
ノ傍ニ^カ隔テ自園ノ印ハ^カ或ハ^カ切字ノ節目ト知ヘク
或ハ對語ノ相致ト知ク或ハ段ノ要文ト知ヘシ
一 此抄ニ古式トハ多ク連テ^カ兩式ヲ指シ古抄トハ^カ貞徳ノ

辭讓ハ
ハシメテ
義ノ洞也

佛令ヨリ埋木^カ噓^カ州ノ類トト一部ニ埋木ノ名ヲ指
カ^カ師資ノ辭讓ヲ^カ察ス^カキナリ或ハ稀ニ本式ト
云ハ^カ今ノ貞古式ノ本々ヲ指テナリ
一 此抄ニ^カ異名異躰トハ或ハ牡丹ヲ^カ涼見草トハ^カ異名
ナリ牡丹^カ辭トハ^カ異躰ナリ或ハ音訓ノ差別トハ^カ自雲
ヲ^カシララモト云フ^カ名ハ^カ異ニシテ躰ハ^カ同シ^カ故ニ^カ異名
下云ク^カ異躰ニト云フ^カ今式ト古抄ノ^カ遠用ノ^カ尚條
ノ古法^カ下ニ^カ悉知スヘシ

再撰^ニ貞享式^ヲ序 並目錄

東老坊

貞享七年十一月廿五日壬申在の詔語と今此詔語
 とさういふやうな詔語の事とてあるより貞享の年十
 とさういふやうな詔語を廿二條より廿九條に改し
 とさういふやうな詔語を廿九條と今此式目也はるゝ
 の戊辰より元禄の癸酉より一つとせぬ向此撰を
 此詔の時代とさういふにあらざる貞享式と題し
 へて後世の人の稱名あらせむとて一節の改
 とさういふにあらざる元禄の癸酉より一つとせぬ

の御本とさういふて詔言連語の妙法とさういふて此詔
 いまも次女君の論のよりて士農工商の人とてさうい
 下字と違の今とさういふに依中此所とさういふに
 とさういふ十九條の裁断と詔語の字論とさうい
 へて存向し此字のるるに依り照の初字も才とて此本
 遠流しに元八月廿六日丙午の詔語とて元禄より同名
 異用の詔あるとてさういふに依りて古の今も同あり
 今此式の書用とてさういふて此とて我々の建流より
 此よりあらざるとてさういふに依りてさういふに
 此に依りて此の案撰よりて或と相致の事入

下冊
下冊

漢ノ宋玉詩
俗人也名國
ト云所所シテ
詩ヲツケル
偏固ハカタ
ヨツメ

あり或とちて清されらるしありゆてモ時人
しむらひて口授めばはにたなれんかか再撰
の場とのそことおそわてはねあきまこと地是
於角のあやしらんやまうとく竹筏の中く
あんまを兔園の冊ととくくおあめこと地北
達とらんを欲出の偏固あきまうとく武路
の右行人の議してけ式とをうくもはとたて孫子
不とけ書とりん一巻一巻の家とことと記譜の
古はとらよあれと他譜の公式かくのそとと式
下はのそ名とまらひい遠くとも書の内種とあり

近くとけ撰の形現とまりて他譜をけしは式の
論とらうとせはよ五倫の交とやうけ訓練と
談笑の用ちりとしきるくかめことくか地
しきことまを命け故あはの授けしとてる建行
のこ地とをわしと也 詳説 詳撰

寶永七 庚寅 十月十二日

鳥ハ日ト
同シナリ日ニ
三足ノカラス
アレハナリ
宝曆十年
辰マテオ
二年也

貞享式目録

大段ハ本式ノ目録ナリ
小段ハ再撰ノ附録ナリ

一 俳諧と誹諧と字論此事

一 他諧と諷諫の道ある事

一 六義我と今の和訓此事

一 冬段句と切字此る事

附 心切の事 中切の事

附 挨拶切の事

一 切と短の差ある事

附 二字切の事 二字切の事

三段切の事 二段切の事

一 心切し多る事ある事

附 とゆりの事 不ゆりの事

大廻の事 去切の事

一 押字と抱字此事

附 句讀切の事

無名切の事

一 二品のうふ此事

附 浮載の事

附 二字切のり

二字切のり

三段切のり

二段切のり

一 心切し多々各ある事

附 とゆりのり

とゆりのり

大廻のり

玄切のり

一 押字と抱字の事

附 句讀切のり

無名切のり

一 二品のうふ此事

附 浮裁のり

一 月花也事

一 指合と去嫌也事

一 意向也事

一 季節の跨るる物也事

附 二季之季子四季よりり物の事

夏之の二季へ之向去まてやめり

一 季とあると新とある物也事

一 各所之雜の發向也事

附 新、躰の事、四季格の事

訛誤の事

欽哉のり

一 八のちのり此事

附 ちのりのり

一 ちのりのり

らんちのりのり

一 百韻の表八句此事

附

發句のり

服の籠子のり

才のり手念のり

可司司の轉のり

一 四折の曲の節此事

附

転向と向作のり

撰集の内秘のり

一 月花此事

一 指合と去嫌此事

一 意向此事

一 季の節の踏くる物此事

附

二季の季の四季のりる物のり

は夏の二季のり向去まぐやのり

一 季とあると新とある物此事

一 各所へ雜の發向此事

附

新躰のり

四季格のり

詠諧のり

一四季子の名類此事

一他譜と殿名遣此事

惣合十九條

古今抄序同終

再撰真言寺

日之一

古今他譜序

芭蕉庵

周代
秦代
漢代
魏代
孔子

夷法
漢代

此は我らの他譜を二子歳のじうしと名ありて
周秦の比より諷諫とあらは漢魏の向と終末と
いふはれは史記と孔子の詩書とをあらはして
和漢の風雅の二をともとあれりまらるるに中心は
の誹諧と子と應安の新式とをあらは慶長
の御年といふまらるる指合とをあらはと
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

聖典トハ
聖ハ石主人
ノリ典ハ
ノリ定規
ノリ

唐制ハ
子述キ
ナニハヤ

張三李四
ハハハハハ
者ナク振
ニ振キナク
ハメル古事
アレハナリ

唐ノリトシテ。まゝあそひ遊々安々とリテ。然レト
シテ。まゝハ一ノ字もや聖典セイ典の程もするをいふ
おとろくあんなるといひは。年トシ月ツキ事コトとくす
とそやとい和歌も。即世キリ持グ氏シのいふあんならする
孔子の家訓も。實政ササメ務政ナラシの在訓と稱して。實ササ極
あひとくあそむとあそびぬまゝ。一能ササ信シの事話
ちり張之本李四の事話と一。一世キリ代シの凡例と
志シはんとあれい極ハナく悪アクとて。一と一ササや實ササや
一善ササととくむ。一これいふに。一或の實極とく。一
て用ゆると。一人の自在と。一用いふと。一人の

沖波の流
任海の五十
鐘川の十

孔子の言ふ事ありてこれに中ちの記述に
連なり此書とていひては此書の信言とあり
今此他書の次々とていふ事ありていふ事あり
とていふ事ありていふ事ありていふ事あり
仰る家ノ教禱の二にありていふ事ありていふ事あり
とていふ事ありていふ事ありていふ事あり
て言はれざるやくの遊楽んやらうと古人の
詞にせよと破らばとあれはと破らば
とていふ事ありていふ事ありていふ事あり
むとていふ事ありていふ事ありていふ事あり

聖典の
聖い聖人
ノリ典ハ
ノリ定規

唐制ハ
子道キ
キニハヤ

張三才の
十の言ハ
者キハ振
ニ振キハ
ハメル古事
アレハヤリ

唐の言ふ事ありていふ事ありていふ事あり
とていふ事ありていふ事ありていふ事あり
孔子の家訓も實政務政の在訓と稱し實極
ありとていふ事ありていふ事ありていふ事あり
ちり張之本子の言ハとていふ事ありていふ事あり
とていふ事ありていふ事ありていふ事あり
とていふ事ありていふ事ありていふ事あり
とていふ事ありていふ事ありていふ事あり
て用ゆるとていふ事ありていふ事ありていふ事あり

府曆十宗
辰三十一
三十一
如クハ日

七五...
公入あんとく取捨一文字の私あく今や一程此
衆徑より近く一世の衆議と衆意は遠く百世
の的也一はるもや天の冥合とやんまや
とまき一都の授記一は式めあともく
は式の名ははるる命

貞享五年辰子孟春如喜日

再撰貞享式

○ 俳諧と誹諧と字論此事

むうり俳諧と誹諧とを和音の字論
あれと誹子史記の素隠し滑稽昔猶俳諧と
怪ちり俳文ありてくまはく此評林と誹諧の所
かみ下り去ると我おの中じ一延表の御代此
古今集よりけり誹諧の二字と別して和歌の所
とあきりけり拾遺集も此二字を用ゆん漢
同名の俳諧とや俳は別名の誹諧とや古今集

俳諧
イイ
カ
誹諧
ト
マ
ア
フ
イ
サ
ス
メ
ル
ト
イ
フ

府曆十家
辰子五
三斗十
如ク
トク
トク
トク

不自在しつて一けぬし無式とひそくに机前の
三斗子とちりて下流子御筆より嘯州のこたき
しちまきとちりて控まきとちりて耳目の
公るあんま取捨し一字の私あく今や一程此
衆徑より近く一世の衆議と寛政の遠く百世
の的盤はゆるやう天理の冥合とちりてまき
とちりて一都の授記とちりて無式めあともくま
は式の名はゆるやういさる命

貞享五年辰子西春如意日

再撰貞享子式

○俳諧と誹諧と字論此事

いりり俳諧と誹諧とを和考の家より字論
あれと流子史記の素隠し滑稽昔猶俳諧とちり
怪ちり流文ありていそはく此評林と誹諧の所
いかり列とちりて我おの中しりて延在の所代此
ち今集しけりて誹諧の二字とちりて和歌の二所
とちりてり拾遺集しちたれ二字と用ゆん漢
同名の俳諧ちりや俳と別名の誹諧ちりやち集

俳諧
カ
イ
ト
マ
ア
俳
倡
メ
イ
ス
ト

し副假名をなれいさるもきくねとて言ひびり
て誹諧ヒイカイくしよと事れいしりしは物の成文
をなれりしをさうしハてはおとすし解し九ふあり
しよ誹諧ヒイカイ二し誹諧ヒイカイ三し誹諧ヒイカイ四し誹諧ヒイカイ五し誹諧ヒイカイ
法輔の眞後おししゆし宗祇の言まうと誹ハ
甫尾坊し誹ハ胡密坊とあれい誹諧と誹諧を
ふる各しし誹諧の非比有るしとふるもなれはと
より代くし誹の字と用いさうし非比坊しより
てなるとなるとふるいしはし對しし身撃を
ししはなれしとるの秘訣ケツししし誹諧はし

過當カダシ多
しむしタリ

すんてはしむせ

東卷云△再撰タヒもるんけはははしく人編の
誹字しけしし一家建まのま地とふり
編タヒ世憤俗ラキヒとつるなをの書は過當とばり
て他のし言撃をまししとて例し我身の
誹言らり也とふししし論しり運まはて同
かすも誹諧の名と増減しし今の誹諧は
常用とてしし同大異の故とまししはし
ふるくも誹諧の遊戯らりときふししけん
誹諧の空キ戯らりとなされし中右の誹おの用

と申用ととらへんは自ら身草子とてはたし
まらふこととらへんは又その言決めをたし
はるべし

○他語に諷諫の道あり来

天地とてはいにきく後天をあり地をありと遠
よふてけり女と人となるとりきりたる人向
の私よりるるに物の中よりありて善をえり
悪をえりあはれと和加とを履くことより来来と
とらへんはれ子をとらへんととらへんはれととらへんは

諷 フウ
カトス
ノミダ

諫 ケン
メス
イサ
アラタ

天地人

世とて

天地人
四ノ人ノ人

此の在在物事の是非をいひてはるるは術の
るるにやとて農工商の宗業とてはるるは
の以てありあはれと人向の世にありたりたれ
中より他語の二るるは漢史に備後省の各へあり
周夫を此むるもはるるはたかたれも魏晋の
もはるるはるるもはるるはるるに周より二の余歳に
るありてはありとよまや○今接とらに他語の
道に在るるの高き遠とたれくより儒教の世に
とやうけて諷諫とありるるは諷諫とあり
法とありて世に今この用とてありたり

世とて

殷紂王
比干

善と善と一悪と悪と一直言と一直諫
されし時主人の機嫌と申さるれば三言の
大なる事と申せしむるに比干の忠王といふ
忠と申せしむるに比干の忠と申せしむるに
儒師の二言一感徳をさるれり或は善なるに
比干ありて殷紂のときも忠王といはれり忠と
忠と申せしむるに比干の忠と申せしむるに

楚王
子西

諫官
目録
五言
法式
揚上
望野
三言
大ね

と申せしむるに比干の忠と申せしむるに
い十言論照の光ぬといふは六神震動其特
とありて比干の忠と申せしむるに
いぬ楚の子西を忠王の臣といふは比
諫官より楚王の忠と申せしむるに
そのより儒師のまじり諫官の五言我れ申し諫諫
とあり最上と申すは比干西といふは比干の忠と
儒師も仰りて提督といふ望野といふは比干の忠と
う忠と申せしむるに比干の忠と申せしむるに
親せしむるに比干の忠と申せしむるに

諷諫し諫めし情程有し楚詞の諷刺又ちや
 ちとさむしとあれせれと又倫の和と本
 君父の善とさしと婦弟の悪とさしと
 善と善とくし悪と悪とくし直言とくし直諫
 されいし時主人の横嫌とやとされと三
 たるとくしやとれとくしより悪王としと
 悪とくしとくしとのれ悪と善とくしと
 儒仰の二音一感執とくしと或と善とくし
 日しありと殷紂のときと悪王ととのれと
 悪とありと比干の腹とさしとくしと悪人の肝

殷紂王
 比干
 比干
 比干

とくしとくしとくしと人向の善悪とくしと
 十言論照の光ぬとくしと六種震動の奇特
 とありとくしとくしとくしとくしとくしと
 いぬと楚の子西と悪王の供とくしとくしと
 諫めより楚王の悪とくしとくしとくしと
 ちとくしと儒術のま子と諫官の互義とくしと諷諫
 とくしと最上とくしとか子西とくしとくしとくしと
 儒家とくしと仰とくしと提學とくしと盗跖とくしとくしと
 うとくしとくしとくしとくしと善人とくしとくしとくしと
 親せるとくしとくしとくしとくしとくしとくしと

諷諫官
 目録
 丑義トハ
 イサメナスル
 法式五ツ
 五ツヤ
 揚上トハ
 揚一トハ
 望野ハ
 望野人ハ
 三ツ望野人ハ
 ちね十リ

楚王
 子西
 比干

迂遠ハ
下リナリ

説
イッカリ

わさねまゝ 詭譎ケイゴかへりて五七此句法と言語の
ありて例の詭譎ケイゴより公道とあり例此
詭譎ケイゴより公道とありて一は之より然るの建る
不フ一は或月を世く此無議よりなる也

東老云け一語の要文と信仙の此此迂遠と
語一此老の人此高キヨ奉と語一此語と
世にの随一とありてとと建所の之と
ついで下字に建の用とついで文章此虚の文
うらむ勸破ケンパと一は之よりありて此の文
孫子の虚説ケイゴの字を此に似たり天道

の夫とよくありて人道の小と此をまゝと
虚の文の虚の文と此よりありてはありと
他語の様をまゝとありて此よりありて詭譎の

高奉あり

○六義我々今の和訓此事

詩言に六義とありて詭譎と此は詭譎とあり
我々よむと此は詭譎とありて連言七詭譎と
此の詭譎とありて賦比興詭譎と此も詭譎とあり
各同よりて凡詭譎と詭譎とあり賦比興と詭譎と

ちよりの詩の所義此所法ありとせしむるは
 六美の後に和漢とに今のあはれをたす味
 古語もいふを六種（分）とせしむるはえあむし
 まことつらうとく毛詩の六美と云ふはこれ
 あり申すは賦比興の之を名に訓とに似て
 了あめ和之とありせし連音とひけしと後二前
 の的ありしと或や昔守此所法ありとあり
 推号と此所法とあり○今按するは六種此
 差ふは凡所頌の之種とて世界の人の和と訓論
 園畦と哀楽ととありつらうとく王侯士民の心

とりてしち賦比興の之緯とて眼界の景物と訓詁
 一論詔と文所質とあり力とてくも熟竹木の
 名とありしむるにち此とて人とたのむ遊心遊水
 の凡所とてあはれ世世の優格とせしむるは
 い王を在れりあはれしとて天下此法をいふは
 ちよりの一とせしむるは六美の六義とて地利と人和
 二用とて是れ各各同とありありとて各々も用
 とありありとて自らとて自らとて自らとて
 六種とて各々の昔用と和訓のあやとありしとせ
 されし能誥の新制ありしとてこれい和漢の字を

中ありて先と我々の愛護しるる所

風

訓義我ニ凡トハ詠諭ナリ多ニハ言ト訓スレト和歌ニ
ハ副歌ト訓スレト比興ノ三躰ニ分ハシモ詩曰凡者
多出於里巷歌謡之作男女相與詠歌各謂
其情周南召南親被文王之化ニ言倫為凡詩
之正經也然レ其国其人ノ凡俗ノ善惡ヲ凡謡ニ
依副テ美惡ニ公レ故ニ凡化トモ註セシナリ○今按スルニ
凡化モ凡俗モ總テ詩歌ノ詠諫ニテ上所化曰凡
下所習曰俗トモ上ハ以凡化下下ハ以凡刺上トモ云ヘリ
何レモ時代ノ凡謡ニ録名代ニ葛蒲ノ謡ヲ作りテ

雅

其代ノ俗樂ヲ刺レ類ナリ○猶按スルニ我家ノ訓
美ニ凡諭ニ字ノ意ヲ運ヒテ諭言凡訓スキヤ
然ラハ俳諧ノ宗ト成セ凡詠諫ノ和モ叶フヘンカ
去レ凡名ノ大騷トハ此等ハ百世ノ明鑑ヲ待ヘシ
訓美ニ雅ハ正ナリ直ナリ多ニハ正言ト訓スレト和歌
ニ直言歌ト訓スレト平話ノ徒言ニ分レ又レシ
俳諧ハ吾訓ノ響音ヲ憚レシ○今按スルニ凡雅ノ三躰
ハ漢土ニ詩經ノ所成ニシテ凡ハ虚ヲ以テ天ニ起リ雅
ハ實ヲ以テ地ニ止レ詩經ハ此ニ美ニ濫觴テ乾坤ノ
二美合ト成レリ故ニ我家ニハ凡雅ヲ虚實ノ二用

頌

ト見テ以ニ懲惡ノ虚ヲ用イテ雅ニ勸善ノ實ヲ用
シ六雅ニ正直ノ意ヲ汲テ大ホテ公言氏訓スヤ也等
ハ異名同躰ノ例ニテ一也ノ實議ニ據ヘテ
訓美ニ頌ハ稱ナリ義ナリ爰ニ祝言ト訓スレ和歌
ニモ祝言ト訓シテ引歌モ節ル所ナシ然レ詩序
ニ雅頌ニ躰ノ様ト推ニ國家ノ諷諫ヲ令口ニ
頌ニ君父ノ壽量ヲ祝シテ神ニ告ル意ハ勿論ニヤ
此故ニ六美ノ引歌モ頌ノ躰ノ明ニテ且外五名
ハ節ハレ○今按スルニ毛詩ニモ雅頌篇朝庭郊廟
樂歌之詞其詔和而莊其美實而密正

賦

之於雅以大ニ其規和テ之於頌以要ニ其止也
詩之大本也然レ六雅頌ノ二用ヌル外ニ莊密
次々ヲ備ヘテ諷諫ノ正直ヲ行ヘリ内ニ和實ノ情
ヲ含ミテ詩之ノ優美ヲ調ヘシ爰ヲ孔子ノ曰
給ル文王ノ文ニシテ孔子多我家ノ太祖ト感荒自馬ノ
和節モ此謂ナリ之經ハ例ノ温厲ヲ知ヘキナリ
訓美ニ賦ハ鋪ナリ量ナリ爰ニ六美言ト訓スレ和歌
ニモ美歌トアリ又選ノ季子註ニモ衆事明白也
ト云ハ眼前ノ物ヲ美並テ直地ニ安情ヲ演シ
謂ナリ定哀怨ノ叙文ニモ賦ハ歌人ノ本意ナリトハ

四季三月雪ノ姿相ヲ詠シ花鳥ノ優游ヲ知レト
ナリ賦ハ殊ニ文章ノ物惣名ナリ

比

訓美ニ比ハ比喻ナリ又ニ准^{ナラス}言ト訓スヘシ和歌ニモ
準歌トアリ優托物比與トハ詩人歌人ノ優情
ヲ梅ヘテ鳥ニモ木ニモ物ヲ言ス類ナリ或ハ韻書ニ
比ニ子ヲ鳥^ト比^ト比^ト於物^ト與^ト托^ト事^ト於物^ト
云ヘリ○今按スニ比ト與トハ姿情ニ先後ノ心得アリ
比ハ物ヲ取テ且ハ姿ニ准テ與ハ物ニ托テ其情ヲ起ス
物ヲ催スト物ニ催スト自他ノ差別ヲ知ナリ此等ヲ
他語ノ微中^ト氏解^ト筋^ト氏云^トキナリ

興

訓美ニ與ハ誘引^ト美ナリ又ニ誘^ト言ト訓セシ和歌
ニ喻^ト言ト訓スレト凡比ノニ訓^ト筋^トハ然レハ與字
ト凡字ノ和訓ハ美中ノ太^ト騷^トニテ我内ノ象^ト議^トハ
知是^トレト百世ノ明^ト監^トヲ恐^トキナリ○今按スルニ與ノ
一美ハ和^ト優^トトモニ合^ト明^トナラヌヤ去^トハ論語ノ陽^ト貨^ト篇
ニ子路ニ詩^ト經^トノ風^ト流^トヲ勸^トテ詩^ト以^ト可^ト興^トハ四季
ノ月^ト雪^ト花^ト鳥^トニ誘^トテ優^ト游^トノ情^トヲ興^トセトノ
謂^トナリ然レテ例^トノ朱^ト註^トニ發^ト起^ト志^ト氣^トトノ
云捨^トハ孔子ノ宣^ト給^トフ似^ト而^ト非^トト物^トニ興^トハ
決^トシテ遊^ト興^トノ與^トト註^トスレシ詩^ト者^ト人心^ト之感^ト

物ニ而形於言ニ之餘也トハ朱氏ノ詩序ニ云
十カウ何故ニ自詔相違セルヤ此等ハ教誡ヲ先ニシテ
文章ヲ後ニセシ論詔一部ノ取違ニテ先後例ノ
察スヘキナリ然レハ與ノ美ヲ以テ詩歌ノ大本ト

知キナリ

○發句ノ切字ノ名理ある事

むしり切字の事十八字の事ありて和歌も連歌
も此の法あり例の所ありて是れとありね
いふと切の心持と云ふはさうさうと自ら言ふ

るありては切の中古の記述よりソレくの各句
あれはさうさうと連言は用はありては此記述の
姿より同所不用のさうさうと志一とせしむ
切字の用はさうと物に對して是れ下の事也此れを
さうさうと切とせしめて物を二とさうさうと切あり終
ありては二章此れ存向ととありたり切字の
用はさうと切と一字の働ありやの事よめまはれと
いふ事と切の切字とありては。此等切の事此
れとさうさうと何誰とさうさうと哉来と休むる
い迷ふと切と切の切と静とさうさうと物に對する

竅議とす。一況や可の所着の解に。詞
おさねとす。つゝ者句。て切まの入不さ。句
とあるをね。と道の自然自説。う。と世の義
と意。して自よ。る。知と。後。う。と。お。さ。ね。不。を
の。物。あ。れ。と。あ。ら。う。ち。と。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と
「信の一字あはく

中切 猫の意やい。時。祇元の勝月

あはく。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と

はなけ。切。い。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と

ち。り。と。句。取。の。お。と。さ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と
と。く。ら。あ。ら。う。中。切。と。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と
句。讀。あ。ら。う。講。師。の。人。に。お。か。ら。う。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と
す。は。ら。う。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と

世と旅と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と
人。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と

揆打切

け。切。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と
自。他。の。揆。打。あ。ら。う。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と
と。物。と。對。と。あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と
あ。ら。う。る。法。う。て。感。作。と

と書は弱とて此もや若らむし保名物の名お
とよせらるるやけ格となし新制なれぬ
例のまじりまじり或は給の類とすけり給ふ
伊勢とあふそむかきつらねさなれと
常られそと常られし神とことと敵討
これと再撰の神句なれおし口と
或は連音し能造しし能地とすりあり
両家の神句の書なれしと論とれし能北
るおまじり。今梅まらた連音の月申の能
句とありし神書はまじり能のしき能おし

神書の神句とありし能の書は能のしき
いさく月申の神書の能句ありしや切字は
入るまじりありし能のしき能地とすけり
例のしきおちりしき

月よまらるる。おありし能。神歌。
二段切
梅の葉。はりし能のしき能地とすけり。

前章と武江の書は能のしき能地とすけり
けの能のしき能のしき能地とすけり
おしし能のしき能のしき能地とすけり
能のしき能のしき能地とすけり

歌見互見
ハ文法ハ見
オモテ見合
セルナ

エイ・リヤン・ゴ・ケン
カケ アラク カカイニル

とにんごらるや△再撰よりんけけと和歌の
我あしあくお。のしきく或とらひたきり。との
しきくおとせまうくと通例あれし今廿二季
いふおのしき切らん切らんあれとけつて
抱字より軒田のしきとあるまきとせとわす
の曲字よりやんせしやんけけの地よりしき
初をのまきとしきしてゑんおとあわしき
どのまきと例し通例のまきとあれし
し今世よりしきとせしきとあ
或と右抄の各目は大廻しといふ抄ゆとら

と當
分ニ
ルハ

とあしにふらあしとられの抄向しとあしに
云抄の各目と當りり我家の或目とら
れしと當議の用捨あらん○字梅もらん
抄字とらんく極むしと格とらるる各目
のありしとあしとあれし和歌しと新に
の名ありしと達^テ云解とら極むしと行中
此あれし面白解とら極むしと面白
て極むしと面白の次ありしと和歌しと達
あしとられの能造し面白とらと極むし
とあしとらるる各目と當物とらと極むし

ナシ
鎖詞
ナサリコトハ
ソチキニナル
詞ナラン

常山ト云
山アルナリ
地ノミダラキ
所
ヌキサシ
ナラマフ

あつてせいの句がせと味とさるるを色してはひの
後さるるをわたりをさるるを別く鎖詞の比を
連言此艶詞とあつてさるるをさるるして他借の
曲意とさるるにあらあつて格と常地の比
を無のさるるして善通のさるるをさるるを人
業のさるるをさるるをさるるの文章訓と
常地の比と深きかさるるの良選は所の歌と後
の比とたかきとさるるをさるるをさるるを
秋のさるるをさるるをさるるをさるるを常山
の地と傳ありて比と尾と詞とをさるるを尾

ひよふとさるるをさるるを文章のいあつてさるるを
とさるるをさるるをさるるをさるるをさるるを
他借と十七子の終よりあつてさるるをさるるを
和音此後此よりさるるをさるるをさるるを
のさるるをさるるをさるるをさるるをさるるを
あつてさるるをさるるをさるるをさるるをさるるを
いさるるをさるるをさるるをさるるをさるるを
へ探象のあつてさるるをさるるをさるるをさるるを
さるるをさるるをさるるをさるるをさるるを
あつてさるるをさるるをさるるをさるるを
あつてさるるをさるるをさるるをさるるを

朗詠
カハリソシモリ
ノナキ
何

おのよれけりきと誤るにんゆふにさあ
てん屋一りの中座とらひ下座とを此大海りせ
まねし七之季とらるるの簡し切てきりて
まを月とあはれ梅とあはれ或は又日此春句
もと何と或は秋日の春句も何とさき
まは秋の朗詠とらひし何し何の事あは
あはれ向かへ詠嘆の余情と細くしき春句
ねえ春句あはれとらひし何とらひし何の
ゆふしつとあはれし人の事しきあはれあは
人の事しきあはれし何とらひし何とらひし

この神ゆのゆはしきしきとらひし何とらひし
ニをを信して古は各同と捉えし解き解
の詞とけししゆふの或月とあはれし何とらひし
知新とらひし何とらひし何とらひし何とらひし
一所の事とらひし何とらひし何とらひし何とらひし
の事とらひし何とらひし何とらひし何とらひし



貞享式りく一終

